

現代英語における感嘆表現

三 宅 亨

はじめに

本稿の狙いは現代英語 (Contemporary English) における感嘆表現の諸相を考察することである。

文の統語構造だけでは、その文の意味、すなわち談話機能は決まらないことは改めて指摘するまでもない。例えば、よく知られた例をみると、

(1) It's cold here.

は形式上は平叙文であり、単なる陳述 (statement) を表わすにすぎないが、この文が発話される脈絡、話し手と聞き手の関係などの社会的要因によっては「窓を閉めてほしい」という依頼や命令になり得る。日本語でも、

(2) 「ああ、喉が乾いた」

という発語は単なる事実を述べているのではなく、「お茶をいれてくれませんか」とか「冷蔵庫のビールをだしてくれ」という依頼や命令になる。このように、一つの統語形式が脈絡次第で様々な談話機能を果たすのである。

次に、逆の場合を考えてみると、

(3) Tell us something about English syntax.

(4) Could you tell us something about English syntax?

(5) I was wondering if you could tell us something about English syntax.

は、それぞれ「命令文」「疑問文」「平叙文」という異なった統語形式を備えているが、談話機能はほぼ同じであるといえる。

本稿で考察を試みる感嘆表現についても同じようなことが指摘できる。英語

には「感嘆文」と呼ばれる統語形式がある。通例 how や what で始まる文が、それであるが、「感嘆」の気持ちを表現するには、他の様々な形式・表現が可能である。(6)のように平叙文が感嘆表現に用いられるのは、しばしば経験することである。

- (6) “That is just about the most preposterous thing I have ever heard in my entire life,” I exclaimed. —*Last Days*

広義に解釈すれば、いわゆる強調構文も感嘆表現に含まれるであろう。また、驚きや詠嘆の感情を瞬間的に表わすのに、文形式 (full sentence) を取らず、“Beautiful!” や “Oh, no!” といった語句だけが用いられるのも極めて自然な現象である。このような様々な表現形式について、以下一つひとつ検討してみたい。

1. How 型感嘆文

このタイプに属するのは、次のような文である。

- (7) *How pretty* she is!

- (8) “Oh, Daddy, *how punctilious* you are,” sighed Jessica. —*Man*

- (9) *How alike* she was to this Mrs. Liebman, whom he had met two nights ago, and who was now treating him like her own son.—*Legacy*

(7) の文は変形理論では、(10) のような基底構造から導かれるものとされる。

- (10) She is so pretty.

すなわち How 感嘆文の基底には強意語 so が含まれ、wh 付与規則によって素性 wh が so に与えられると、感嘆詞 how が派生される。その後で感嘆詞移動規則によって how を含む句全体が文頭に移動する [今井・中島 1978:206-241]。

この理論の優れている一つの点は、従来、very を含む文を感嘆文に変換させる、という学校文法などでの解釈では説明しきれなかった次のような例を説明できるということにある。

(11) How strange, she thought, *how very strange* indeed to be doing this! —*Legacy*

(12) How odd! *How very odd!* This had not happened to him since he was young. —*Living Daylights*

もし How 感嘆文が very を含む文から「very → how の変換」によって生成されるとすれば、(11) と (12) のイタリック部分は生じないからである。

このタイプの文はこれまで挙げた形容詞句を強調した感嘆文に用いられるだけでなく、副詞句を、さらに動詞や名詞句を際立たせるのに用いられることもある。

(13) a. *How fast* he runs!

b. And he replied, “I can’t tell you *how much* I look forward to working with you.” —*Man*

(14) a. “You can’t know *how it hurts*,” she said. —*ibid.*

b. “How wonderful! *How I envy* you!” —*Legacy*

(15) a. *How big a dog* it is!

b. When I think back to the time when we were in junior high school, I recall *how happy a time* it was for us; it would never have occurred to us not to go to school, you see. —*English*

しかし、(15) の型 (How+形容詞+不定冠詞+名詞) は稀であり、普通は後で述べる What 感嘆文 (What+不定冠詞+形容詞+名詞) を用いて、

(16) *What a big dog* it is!

のような文にする。¹⁾

(15) のように不定冠詞を伴う名詞句とは異なって、much, many, few, little の数量詞を伴えば、what 感嘆文は用いられず、How 感嘆文が用いられる。

(17) a. *How many books* you have!

b. * *What many books* you have!

c. * *How a lot of* books you have!

d. *What a lot of* books you have!

a lot (of), lots (of), a number (of), a great deal (of)などを伴う場合には、上にみるように What 感嘆文が用いられる。

感嘆文はその機能からして、しばしば省略が起きる。すなわち How 感嘆文では文頭の how を含む語句だけが発話され、脈絡などから自明の語句は省かれてしまうのである。

(18) “*How terrible,*” said Max Breslow. —*XPD*

(19) “Oh *how exciting,*” Mrs. Robinson said. —*Graduate*

(20) I said, “*How very nice* to meet you.” —*Japan*

(21) “Sergio! *How marvelous* that you should call! I was just thinking about you!” —*Playboy*, Dec., 1981

(18) や (19) は発話の状況からあとの言葉は冗漫であり、それを言う必要がない場合²⁾, (20) と (21) は “it is” が省略された場合である。特に “It is + Adj. + of + NP + to-infinitive” 型の形容詞の場合は感嘆文ではこの “it is” の省略は義務的になる。

(22) a. It was so careless of me to lose the contact lens.

b. **How careless of me it was to* lose the contact lens!

c. *How careless of me to* lose the contact lens!

(23) When Julia had finished reading the letter she said, “I think she’s a wonderful woman. *How very, very sweet of her to* write like that...” —*Mortmain*

(24) “*How silly of me,*” I said, brushing my hand across the top of my streaky hair and wondering how I could possibly get out of this. —*Last Days*

さて、Long (1961:80) は、現実にはこの How 感嘆文よりも What 感嘆文のほうがよく使われるとし、村田 (1984:51) は、How 感嘆文は「文語的 (literary) で、形式ばって (formal)、今日ではお年寄りのおばあちゃんの表現」であるとしている。

2. What 型感嘆文

このタイプの感嘆文は上述の How 感嘆文と共に代表的な感嘆表現とされるものであり、次のような文を指す。

(25) *What a pretty girl* she is!

(26) *What a fool* I have been! —*Jonathan*

(27) “My, my,” she teased, “*what a terrible reputation* I have.”
—*Overload*

再び変形理論を借用すれば、(25) は次のような基底構造から導かれるものとみなされる。

(28) She is *such* a pretty girl.

How 感嘆文の場合の *so* に代わって、What 感嘆文では基底に *such* が含まれ、wh 付与規則により感嘆詞 *what* が派生される。

この後 *what* を含む要素が移動するわけであるが、*what* に導かれる語句は名詞句であるため前置詞を伴うことがある。その場合 formal な文体では、この前置詞も文頭へ移動する [Leech-Svartvik 1975:274]。

(29) *What a difficult situation* he's *in*!

(30) *With what amazing skill* this artist handles the brush! <*formal*>

ところで、この構文において *what* で導かれる名詞句は不特定 (indefinite) のものでなければならない。

(31) a. *What a present* he had given the girl!

b. *What a girl* he had given the present!

c. * *What the present* he had given the girl!

d. * *What the girl* he had given a present!

これは *what* を含む名詞句が形容詞句の持つ段階性 (gradability) を持つためである、と解釈される。なぜならば、(31a) のような文は文脈によって “*What a very good present...*” と “*What a very bad present...*” とも解釈されることがあるからである [Quirk *et al.* 1972:58]。

しかし、今井・中島（1978:198-199）が指摘するように *what* の被修飾部の主要語が常に段階的（gradable）であるとは限らない。

(32) *What a man* he is!

(33) *What a paper* it is!

この場合、(32) や (33) は「程度」についての感嘆ではなく、「種類」や「性質」が変則的であることについての感嘆を表わす。類例を挙げておく。

(34) “*What a friend* George has turned out to be,” said Florentyna.
—*Prodigal Daughter*

さて、ここで *How* 感嘆文と *What* 感嘆文について比較してみることにする。まず、この二つの感嘆文は相補分布をなす [今井・中島 1978:192-199]。すなわち、*how* は叙述形容詞、副詞句、動詞句を修飾するのに対し、*what* は名詞句を被修飾語とするのが原則である。ただし、名詞句に関しては、既に1の(15)～(17)で少しふれたように、冠詞の種類と位置、数量詞の種類によって二つの感嘆文は使い分けられる。名詞が質量名詞や複数名詞の場合は *What* 感嘆文のみが用いられる。

(35) a. *What terrible stories* he told!

b. **How terrible stories* he told!

(36) a. *What good wood* he bought!

b. **How good wood* he bought!

(37) And *what books* there are to work with! —*Encounters*

つぎに、この二つの感嘆文に共通する点を考えてみる。まず、これらの文の語順は *wh* 要素を文頭に置く以外は、平叙文の語順を守るのが原則である。しかし、動詞が *be* の場合や主語が「重い」ものである場合は、重い要素を文末に置く、という一般原則（End-weight）により、倒置が生じることもあるが [村田 1983:176]、主として文語調（literary）な文に限られる [Quirk *et al.* 1972:7.78]。

(38) How dreadful is this place!

(39) How strange is the illusion by which men sustain themselves!
さらに、次のような倒置も行なわれる。

(40) How much more would he have known by now if Chiang had come
to him on the day that he was Outcast! —*Jonathan*

第2の共通点は、いずれも比較級を伴わないことである。ただし、上例(40)や、下の(43)のように“much more”の場合は適格文となる。

(41) * *How more careless a man he is!*

(42) * *What a prettier girl than Sue Mary is!*

(43) *How much more there is now to living!* —*Jonathan*

これは how が直接に more を修飾するのではなく、いったん much を修飾し、改めて how much が比較級を修飾するからであると考えられる。

第3の共通点は、否定形にならないという特徴である。

(44) * *How brilliant a woman Joan isn't!*

(45) * *What a much more splendid plan it isn't!*

以上にみてきた What 感嘆文や How 感嘆文は、男性より女性によって使われることが多いとされる [Long 1961:80]。この指摘は、上にみた変形理論と照らし合わせてみると、興味深い事実を示している。変形理論によれば、How 感嘆文の基底には so が、What 感嘆文の基底には such が存在するとみなす。ところで、この so と such はいずれも男性よりも女性の話し言葉の中に多くみられる現象である [Quirk *et al.* 1972:7.79]。とすれば、特に女性の言葉では、平叙文や疑問文においては so や such が、感嘆文においては how や what が多用される、といえるのではないだろうか。

3. 感嘆疑問文 (肯定)

このタイプの感嘆文は次のようなものである。

(46) “*Was I glad to see her!*” —*Love Story*

(47) Then they laugh. And *do they laugh!* —*Talking Horse*

(48) I want you to be there, just you, with open arms for the returning prodigal. And *will I ever be glad to see you!* —*Legacy*

(49) “*What do I know about towns in Germany?*” said Breslow in a sudden burst of irritation. “I am a U.S. citizen. I live here in California...” —*XPD*

これは修辞疑問の一種とみなされることもあるが、語順は疑問文と同じ倒置形を取りながら、実は話し手の強い肯定的確信を表わす、くだけたスタイルの感嘆表現である。通常の疑問文とは異なり、イントネーションは高いピッチが続き、文尾で下降調となる。³⁾

(50) a. Was he mad! または, Was he mad! (感嘆文)

b. Was he mad? または, Was he mad? (疑問文)

ところで、この感嘆疑問形はしばしば Boy, God, Jesus などの間投詞を伴って用いられる。

(51) a. *Boy, do they fight!* —*Sophie's Choice*

b. “*Boy, am I glad to see you!*” Coburn took Rashid's arm.
—*Eagles*

(52) a. *God, was it freezing.* —*Love Story*

b. *God! Am I glad I reached you!* —*Chances*

(53) a. *Jesus, were they ugly.* —*Chameleon*

b. *Jesus, has he gotten tall.* —*Second Heaven*

(54) a. *Christ, was I proud.* —*Love Story*

b. “*Man, is this interesting,*” he said. —*Graduate*

N. McCawley (1973) は、この種の感嘆表現は普通の疑問文とは異なって強意語 (intensifiers) とは共起しない、と述べている。

(55) a. *Is syntax $\left\{ \begin{array}{l} \text{very} \\ \text{quite} \\ \text{extremely} \\ \text{that} \end{array} \right\}$ easy!

b. Is syntax $\left\{ \begin{array}{l} \text{very} \\ \text{quite} \\ \text{extremely} \\ \text{that} \end{array} \right\}$ easy?

さらに、この感嘆文でも比較級や最上級は用いられないとする。また、ever が用いられる場合、感嘆文と疑問文では ever の意味が異なる。

(56) a. Is syntax *ever* easy! (ever=really, truly)

b. Is syntax *ever* easy? (ever=at any time)

(57) “Jesus!” he said. “Am I *ever* glad to see you.” —*Lucy Bending*

既にみた (48) の例に含まれる ever も「本当に、とても」の意である。

彼女はこの他にも両者の統語上の違いを幾つか挙げている。また今井・中島 (1978:242-244) も同じような指摘をしており、詳しくはこれらの論文に譲るとして、この感嘆表現が疑問文と異なるのは単に音声面だけではないことに注意すべきである。

尾上 (1957:154) は「筆者の持ち合わせの材料では1920年代の末が最も古い」とし、村田 (1984:51) は「1950年代のアメリカの若者の間で流行した」表現であると述べている。この感嘆表現の起源について Foster (1968:94-95) は、このタイプの感嘆文はドイツ語によくみられる表現で、これがアメリカの口語に取り入れられ、やがて英国用法にも広がったと断定している。

4. 感嘆疑問文 (否定)

このタイプに属するのは、次のような文である。

(58) *Isn't that delightful!* —*Space*

(59) “*Isn't that something!*” he cried. —*New Hampshire*

(60) “*Now, isn't that a likely story,*” she said. —*Mischievous Doll*

この表現は3のタイプの否定文の形を取って表わされる。話し手が強く感じている肯定的命題内容について聞き手に同意を求めているという含みがあり、否定語を含むため、3に比べると断定・確信の度合いが薄れ、5で述べる付加疑

問文との接近が認められる。そのため、表記上 exclamation mark の代わりに question mark が用いられることがある。

(61) Isn't this wonderful?

(62) "Aren't you clever?" Emma marveled. — *Eye*

(63) "Oh, Peter, isn't he an angel?" — *Odessa File*

(63) にみられるように、このタイプの感嘆文もまた Oh などの間投詞と共に用いられることがある。

(64) *Oh*, isn't this lovely! — *Virginia Woolf*

(65) "*Ah*," she said, "isn't that wonderful!" — *Homesick Restaurant*

このタイプの感嘆文は、本来統語的には聞き手の同意を求める構文であるため、(66b,c) のように聞き手が同意のしようがない文は非文である [Quirk *et al.* 1972:7.70]。

(66) a. Am I hungry!

b. *Am I not hungry!

c. *Aren't I hungry!

音声面では、この否定感嘆疑問文は3のタイプと同じように文尾において通例下降調となる。⁴⁾

この構文は、今日では3のタイプよりよく用いられる。その理由は、断定を避け、相手に判断を委ねるといった心理が、このような否定表現を選ばせるからであると考えられる。次は、すでにみた so と共に使われた、女性の発話の典型的な例である。⁵⁾

(67) "*Isn't it marvelous?*" She sighed. "I'm so happy." — *Chances*

5. 付加疑問文

付加疑問文は、形式的には一つの陳述の後に簡単な疑問形を付加して作られ、その談話機能は陳述に対する聞き手の確認や同意をもとめるものである。

(68) She is really pretty, *isn't she?*

のような付加疑問文は上昇調で発音されると「疑問」の意が強いが、下降調で発音すると聞き手に「同意」を求めることになり、後者の場合4と同様に感嘆の意を持ち得る。しかも(68)や、さらに(69)のように *really* という強意語の使用が一層感嘆文としての機能を強める。しかし、統語的には疑問文の要素が強いので4のタイプに比べると強調・断定の色彩は極めて薄くなる。

(69) “Now why do you think I’m humourless?” he said with an indulgent smile.

“Piers, you really don’t know yourself, *do you*. I don’t think I’ve ever heard you actually laugh, and a smile is as rare as a waterfall in Palestine.” —*Shakeout*

付加疑問文はふつう肯定文に対し否定文、否定文に対し肯定文の疑問形が用いられるが、肯定文に対し肯定文、否定文に対し否定文の疑問形が用いられることがある。この場合イントネーションは、どちらかといえば、上昇調が用いられ、しばしば相手の言ったことに対する関心・疑い・驚きを表わし、時には皮肉の意になる。

(70) So you’re getting married, *are you*? How nice! —Swan [1980:515]

(71) “He *did*, *did* he? I wonder why.” —*Last Days*

(72) She jotted her address and phone number on a page of his diary.

“So you’re a left-hander, *are you*, Liz?” —*President*

(73) “It’s funny. I was wondering maybe we should be talking about having another child.”

“You *were*, *were you*?” —*Kramer*

以上みてきたように、付加疑問文も「驚き」などを表わす感嘆表現として用いられることがある。

6. 追加陳述⁶⁾

これは次の例にみられるように、平叙文の後に疑問文ではなく平叙文が付加された場合である。

(74) He likes beer, *he does*. —Swan [1980:524]

(75) You're really clever, *you are*. —*ibid.*

(76) She was very effective, *Nora was*. —*Press Lord*

これは先行する「主節」を繰り返すことによって、伝達内容（に対する話し手の確信）を強調しようとするものである。(76)のように代名詞で文を始め、後からその代名詞の指す名詞を述べることもよく行なわれる。また、強調の気持ちをより明白にするために *really* などを加える場合がある。

(77) Martha's a devil with language; she *really is*. —*Virginia Woolf*
さらに、このタイプの構文では主語を後に回し、動詞を先行させて述部を強調することがある。

(78) Getting in my way, *you are*. —Swan [1980]

(79) Likes his beer, *John does*. —*ibid.*

(80) A fine mad bastard, *Frank Barry is*. —*Devil*

(81) Very fond of you, *that girl*. —*ibid.*

このタイプの構文は英国用法でアメリカでは稀である。アメリカ人にはこの表現は一般に「皮肉」を表わすと解釈される。⁷⁾ この構文に限らず、概して付加文 (tag) の使用頻度はアメリカよりも英国のほうが高く、現代の英米の現代劇を比較してみると、英国の作品のほうが数倍も多く付加文を用いているという最近の調査もある。⁸⁾

7. 繰り返し感嘆文

相手が言った文の内容に驚いて、その文（または、その一部）をそのまま繰り返して用いることがある。その際、音調は昇降調になる。このような文を

繰り返し感嘆文 (Echo Exclamation) と呼ぶ。⁹⁾

(82) A: I'm going to London for a holiday.

B: *To London!* That's not my idea of a rest.

(83) A: Have you been to Paris?

B: *Been to Paris?* I'll say I have!

(84) "What was it that Elfrida wanted you to tell me?"

"She was worried how you would take it, although I said I couldn't see why you would object...She's gotten married."

"What — *Elfrida married!*" The unexpected news gave Corde a sharp pang. — *Dean's December*

(82) のAの発話に対して、Bは上の "To London!" の代わりに相手の文をそのまま (この例では主語は変わるが) 繰り返して "You're going to London!" と、また一部だけを繰り返して "Going to London!" "London!" とも言える。

さらに次のような省略も生じる。

(85) A: I hear you're a linguist.

B: *I/Me a linguist!*

(86) A: Ted's going to write the music.

B: *Ted write the music?* What a splendid idea!

これらのBの発話では主語と動詞の不定形が用いられ、Be動詞の場合には省略されている。もし(85)と(86)のBの文が上昇調で発話されると、いわゆる「非難の不定詞 (infinitive of deprecation)」¹⁰⁾ にあたり、相手の発言内容に対し、そんなことは不可能であるとか、馬鹿げているとしてしりぞける意味になる。

(87) Playboy: Do you still tease readers?

Collins: *I? Tease?* How dare you! My God!

— *Playboy*, April, 1984

のように主語と不定形とのあいだにポーズが置かれると、両者の結びつきが有り得ないことを一層強調することになる。

8. 命 令 文

改めて指摘するまでもなく、命令文の基本的な機能は相手に対する「命令」であり、語用論的に言えば、その場の状況等により「要求」「依頼」「懇願」「願望」「提案」「許可」などの機能をも果たす。本稿の冒頭にも述べたように文の統語構造だけでは談話機能は決まらない。命令文のもつ発話機能は相手に自分の期待する反応を起こさせることにあり、同時に、その発言の裏には話し手の強い感情のあることを読み取らなければならない。命令文を感嘆表現のひとつとみなすこともできる。

(88) Oh, go to hell!

のような文を文字通りに「命令」と解釈し、聞き手が実行に移すことは不可能である。聞き手はこの発言の裏にある話し手の怒り、いらだち等の感情を読み取り、その場にふさわしい行動を取ることを要求されているのである。

9. そ の 他

これまで1～8で取り上げた以外にも、幾つかの感嘆表現がある。

(89) What he wouldn't give to have a mother who acted like other mothers! —*Homesick Restaurant*

(90) Who should come in but the mayor himself!

—Leech-Svartvik (1975)

(89) は一種の修辭的表現で、“He would give anything...!” の意であり、(90) の should は putative “should” と呼ばれるもので “I'm surprised that your wife should object.” の should に通じる。この他にも、池田 (1967:87-88) は、That 節や If 節が希望・遺憾・願望などの強い感情を表現するのに用いられることを指摘している。

(91) a. Oh, *that* I could go!

b. *That* she should receive an offer of marriage from Mr. Darcy!

- (92) a. *If I could only go to see him!*
b. *If the rain would only stop!*

すでに上に何度も具体例で示したように、感嘆表現はしばしば文形式によらず、省略して用いられることが多い。反射的に沸き起こる強い感情を表現する時に長い文を用いたのでは間延びすることがあり、時には感情のあまり文を発するのが不可能なこともある。かつてケネディ米大統領が狙撃された時、傍らのジャクリーヌ夫人が“*Oh, no!*”と叫んだ話はよく知られているが、このような場合は言葉を発することさえ出来ないのである。ここではどんなに長い文よりも、短い間投詞のほうがより雄弁に彼女の感情を表現しているのである。

短い語句を用いて感嘆の気持ちを表現することはきわめて日常的に繰り返されていることである。

(93) “*Right!*” cried Iowa Bob. —*New Hampshire*

(94) “*Bad attitude!*” He laughed, and turned serious again.

—*China Syndrome*

Quirk *et al.* (1972:7.88) は、miscellaneous exclamations として次のような例を挙げている。

(95) Faster! Not so fast! Goal! Success! Good! Excellent! You lucky girl/boy; Well, well; Oh dear; (What a) pity! Shame! Poor John; Silly boy!

このような省略がさかんに用いられる一方で、冗漫とも思えるくらい同じ語を繰り返して感嘆の意を表わすことがある。これも女性に多くみられる用法であるといわれている。¹¹⁾

(96) “You *bug him* and *bug him* and *bug him*,” she said. —*Love Story*

(97) “Struthers is sweet, but he is *boring, boring, boring.*”

—*New Hampshire*

(98) "It's *not* true," she burst out. "*Not, not, not!*" —*Lucy Bending*

(99) "Dad was a big man, *very* strong and *very* masculine but *very* gentle. The whole time I was growing up, he *never, ever, ever*, spanked me. *Never*. He just couldn't do that," said Butcher.

—*Bee*, July 22, 1984

10. む す び

これまで主として現代の小説等の文献から例を挙げて感嘆表現をみてきた。では、現実の日常生活においてはどのような表現が実際に用いられているのだろうか。筆者は1985年の夏、アメリカおよびカナダ滞在中に以下のような簡単な調査を行なってみた。

調査に協力してくれた回答者はアメリカ人35名（男17名，女18名），カナダ人24名（男10名，女14名）の計59名であり，年齢構成は15歳から70代までに及び，身分的には学生，会社員，公務員，主婦，教員，定年退職者等，様々であり，その学歴も多様である。回答者に次の各文を示して，自分がふだん実際に使用する文（型）はどれか，また絶対に使用しない文（型）はどれかを尋ねてみた。

- (a) How pretty she is!
- (b) What a pretty girl she is!
- (c) $\left\{ \begin{array}{l} \text{Boy} \\ \text{Wow} \\ \text{Man} \\ \text{My} \end{array} \right\}$, is she pretty!
- (d) Isn't she pretty!
- (e) She's really pretty, isn't she?

その調査結果（複数回答）を示すと以下のようなになる。

現代英語における感嘆表現

文 型	ふだん使用する	絶対に使用しない
(a)	4名 (6.8%)	37名 (62.7%)
(b)	16名 (27.1%)	16名 (27.1%)
(c)	16名 (27.1%)	26名 (44.1%)
(d)	37名 (62.7%)	2名 (3.4%)
(e)	30名 (50.8%)	9名 (15.3%)

まず、(a)の How 感嘆文からみていくことにする。この構文は最も使用率が低い表現であるが、この構文を使用すると回答した4名はいずれも50歳以上の世代に属する。逆にこのタイプの感嘆文を使用しないと回答した者は男女ともあらゆる年齢層に認められる。

次に(b)の What 感嘆文については使用すると答えた者と使用しないと答えた者の数値が一致する。しかし、さらに詳しく尋ねてみると、(b)のような full sentence の形では言わないが、“What a pretty girl!” のように省略形でなら用いると回答した者が8名ある。これを加えると、全回答者の40.7%が What 感嘆文を使用していることになり、How 感嘆文との使用頻度の差が歴然としてくる。

(c)の感嘆疑問文については27.1%が使用すると答えているが、アメリカ人の場合は20代後半から50代前半に集中し、カナダ人(7名)はすべて比較的若い年齢層に属する。反対に使用しないと答えた人たちの数は(a)に次いで多いが、このグループに属する人はアメリカ、カナダとも50代以上が圧倒的に多く(26名中21名)、また10代の若者も用いないようである。

この調査の対象となった5構文のうちで最も高い使用頻度を示しているのが(d)の構文であるが、全回答者中男性の55.6%、女性の66.8%がこのタイプの感嘆表現を用いると答えている。

最後のタイプ、(e)型の感嘆表現は(d)について高い頻度を示している。全男性の48.1%、女性の53.1%がこの表現を用いると答えている。また(e)の文ではないが、“I think she is pretty, don't you think?” のような付加疑問文を用いることがある、と答えたカナダ女性(60歳以上)もあった。

さて、以上のきわめて簡単な調査から感嘆表現の使用に関して、次のような特徴を読み取れるのではなからうか。¹²⁾

まず、上の表に現われたように今日の話し言葉においては(d)や(e)のような統語的には断定を避けた形式が好まれる傾向が認められる。全回答者中49名(83.1%)が(d)または(e)の表現形式を用いると回答しており、うち28名が両方の形式を用いるという。これに対し、最も代表的な感嘆文とされる(a)(b)の両タイプについては、15名(25.4%)がいずれかの表現形式を用いると答えているが、両方とも用いると答えた者はその内の2名にすぎない。また、すでにみたように、(c)の形式は使用する人の数は決して少なくはないが、はっきりと自分は使わないと答えた人のほうがはるかに多い。さらに使用する年齢層に片寄りがみられる。このことは、村田(1984)の言うように、一時期の流行語であり、すでにその役割を終えつつあるのかも知れない。

最後に、この分析結果から一つの英語教育上の問題点を指摘するとすれば、従来感嘆文の指導においては How 感嘆文と What 感嘆文にのみ重点を置いてきたが、communication を重視するならば、もっと(d)や(e)のような統語形式も教えていく必要があるのではなからうか。

〔注〕

- 1) 『英語語法大辞典』, pp.1037-1039
- 2) Quirk *et al.* (1972:5.28 Note) は (18) や (19) のような文について、欠けている要素は唯一的に復元することができない (cannot be uniquely recovered) ので、これを省略とみなす必要はないと述べている。
- 3) Fries (1952:163-164)
- 4) アメリカ英語においては、上昇調が用いられることもある。Quirk *et al.* (1972:7.70) (1985:11.22)
- 5) R. Lakoff (1975) によれば、女性の使用する言葉の特徴の中には、断定的な表現をできるだけ避ける、「甘い形容詞 (empty adjectives)」を多用する、so や such といった強意語を好むなどがある。(67) の marvelous も empty adjectives に含まれると解してよい。
- 6) 通例 appended statement と呼ばれるが、Quirk *et al.* (1972:14.50 Note) は

exclamatory tag, Swan (1980:524) は reinforcement tag と呼んでいる。

7) Bolinger (1980:84-85)

8) Ilson (1985:179)

9) Quirk *et al.* (1972:7.84)

10) Jespersen (1940:20.3.2)

11) 吉田 (1982:20) の考察による。なぜ女性の言葉に繰り返しが多いのか、その理由のひとつとして、繰り返すことによって生じる音響効果が好まれるからではないか、と述べているが、筆者は、R. Lakoff の言うように女性は社会的に従属的な地位に甘んじてきたため、その発言も軽視されがちであるので、自分の意見を聞いて欲しいという心理が自然と繰り返しを生み出すという側面もあるのではないかと考える。

12) この調査は北米英語に限られるため、英国その他の英語使用国の実情を加味すると多少の違いが生じる可能性はある。

参考文献

安藤貞雄：『英語語法研究』，研究社，1969

Bolinger, D. : *Language—The Loaded Weapon*, Longman, 1980

Foster, B. : *The Changing English Language*, Penguin, 1968

Fries, C.C. : *The Structure of English*, Harcourt, Brace, and Company Inc., 1952 (Rpr. by Longman, 1971)

池田義一郎：英語の語法 表現篇6『否定・疑問・強意・感情の表現』，研究社，1967

Ilson, R.F. : “Usage Problems in British and American English”, in S. Greenbaum (ed.), *The English Language Today*, Pergamon Press, 1985

今井邦彦・中島平三：現代の英文法第5巻『文(Ⅱ)』，研究社，1978

石橋幸太郎，他：『英語語法大辞典』，大修館書店，1966

Jespersen, O. : *A Modern English Grammar*, Part V, George Allen & Unwin, 1940

Lakoff, R. : *Language and Woman's Place*, Harper & Row, 1975

Leech, G. & J. Svartvik : *A Communicative Grammar of English*, Longman, 1975

Long, R.B. : *The Sentence and Its Parts*, The University of Chicago Press, 1961

McCawley, N. : “Boy! Is Syntax easy!”, in *PCLS* 9, 1973, 369 - 377

村田勇三郎：『機能英文法』，大修館書店，1983

—————：講座・学校文法の基礎7『文(Ⅰ)』，研究社，1984

尾上政次：現代英文法講座 8 『現代米語文法』，研究社，1957

Quirk et al. : *A Grammar of Contemporary English*, Longman, 1972

————— : *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman,
1985

Swan, M. : *Practical English Usage*, OUP, 1980

吉田一彦：『現代英語発見』，三修社，1982

引用作品 (注) イタリック体字は本文で使用した略称を示す。

A. 新聞，雑誌

The Sacramento *Bee*

Playboy

B. 小説，作品

Albee, E.

Who's Afraid of Virginia Woolf? (1962)

Archer, J.

Shall We Tell the President? (1977)

—————

The Prodigal Daughter (1982)

Bach, R.

Jonathan Livingston Seagull (1970)

Bellow, S.

The Dean's December (1982)

Brady, J.

The Press Lord (1982)

Collins, J.

Chances (1981)

Corman, A.

Kramer versus Kramer (1977)

Deighton, L.

XPD (1981)

Diehl, W.

Chameleon (1981)

Erdman, P.E.

The Last Days of America (1981)

Fast, H.

The Legacy (1981)

Fleming, I.

The Living Daylights (1962)

Follett, K.

The Shakeout (1975)

—————

Eye of the Needle (1978)

—————

On Wings of Eagles (1983)

Forsyth, F.

The Odessa File (1972)

Gardner, E.S.

The Case of the Mischievous Doll (1963)

Greene, G.

Mortmain (1967)

Guest, J.

Second Heaven (1980)

Hailey, A.

Overload (1979)

Higgins, J.

Touch the Devil (1982)

現代英語における感嘆表現

- | | |
|-------------------|---|
| Irving, J. | <i>The Hotel New Hampshire</i> (1981) |
| Malamud, B. | <i>Talking Horse</i> (1972) |
| McLean, P. | Talking about <i>Japan</i> (1979) |
| Meads, L.J. | Japanese to <i>English</i> (1980) |
| Michener, J.A. | <i>Space</i> (1982) |
| Pimsleur & Berger | <i>Encounters</i> (1974) |
| Sanders, L. | The Case of <i>Lucy Bending</i> (1982) |
| Segal, E. | <i>Love Story</i> (1970) |
| ————— | <i>Man, Woman and Child</i> (1980) |
| Styron, W. | <i>Sophie's Choice</i> (1979) |
| Tyler, A. | Dinner at the <i>Homesick Restaurant</i> (1982) |
| Webb, C. | The <i>Graduate</i> (1963) |
| Wohl, B. | The <i>China Syndrome</i> (1975) |

(1985. 9. 19 受理)